柏原市文化財概報　1993-Ⅷ

玉　手　山　遺　跡

１９９３年３月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市の埋蔵文化財包蔵地は、市域の３分の２以上を占め、大阪府下でも最も遺跡が密集して存在している地域です。今回の調査地は、玉手山古墳群の丘陵稜線上にあり、古墳の存在が予想された場所でありましたが、弥生時代後期の住居跡が検出されました。高地性集落と呼ぶのにはあまりにも低丘陵上ですが、この時代には住居を丘陵頂上に築造するということが当時の生活の上で必要であったのでしょう。この玉手山丘陵において弥生時代の集落の存在が確認されたのが２例目であります。

この調査結果は、柏原市の歴史環境復元にとどまらずより多くの各方面からの人々に活用して頂き文化的向上に寄与する様に祈願するものであります。最後に、調査及び報告書作成にあたり、関係各位にご理解とご協力を頂いた事を記して感謝いたす次第であります。

柏原市教育委員会
教育長　庖刀　和秀

例　　言

1．本書は、平成５年度に柏原市教育委員会が原因者負担事業として実施した発掘調査のなかで玉手山遺跡（93－３次調査）における発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係　北野　重を担当者として、柏原市玉手町227の所在地において、平成５年４月６日試掘調査を実施し、平成５年５月26日～６月11日までの期間実施した。調査に要した諸費用は依頼者が負担した。

3．発掘調査と本書作成にあたって、株式会社ツーカーホン関西、土地の立ち入り等にご協力頂いた玉手山遊園地に対して厚く御礼申し上げます。

4．調査の実施にあたり、下記の諸氏の参加、協力があった。
米田　博　吉田　宏　山田寛顕　安村俊史　石田成年　寺川　款　生駒美洋子　阪口文子
槇原美智子　松尾洋平　酒井英利香　西島伸彦　尾野知永子　奥野　清　谷口鉄治
分才隆司　乃一敏恵　有江マスミ　村口ゆき子

5．本書の構成、執筆は北野が行った。

6．本書で使用した標高、方位は、特に注記しないかぎりＴ．Ｐ．と磁北である。

玉手山93－３次調査

・調査地区所在地　柏原市玉手町227

・調査担当者　　北野　重

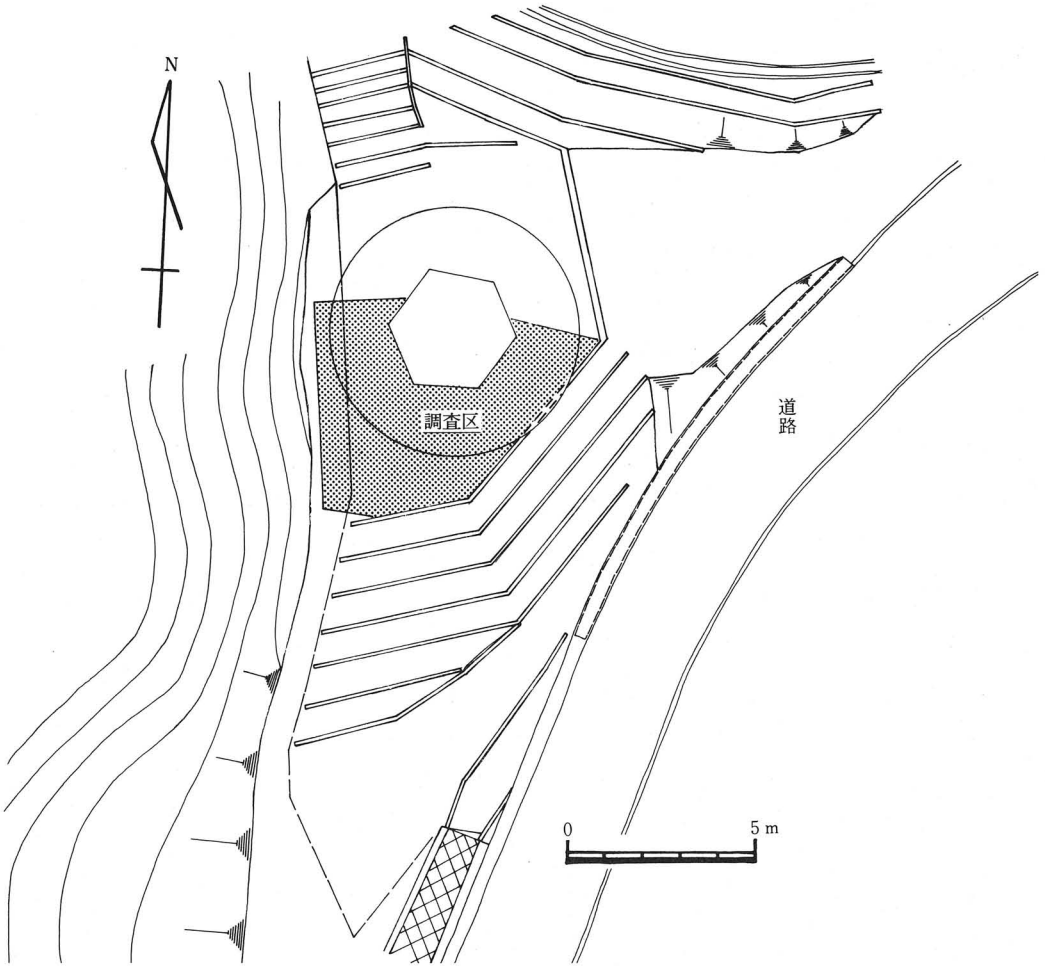
・調査期間　　平成５年４月６日（試掘調査）

　　平成５年５月26日～６月11日（本調査）

・調査面積　　35㎡／99.9㎡

玉手山遺跡は、南北方向に伸びる玉手山丘陵を中心としてその周辺部に広がる旧石器時代から歴史時代までの複合遺跡である。その中でも弥生時代から奈良時代にかけては河内地方の中心的位置を占めている。弥生時代は、玉手山６号墳付近から竪穴式住居、丘陵南半の地区から集落跡の遺構が発見され、丘陵各所に遺物の散布地がある。古墳時代は、国又は豪族の支配者層と考えられる早くから古墳を築造する集団が存在し、中期の古市古墳群に先立って丘陵稜線上に連綿と約50～100m級の前期の古墳が築造されている。近年の調査では、丘陵の中位尾根筋に須恵器を伴う古墳も発見され、同時期古墳群の存在が考えられる。さらに２ケ所に横穴古墳群があって、それぞれ国又は豪族に支配された渡来系氏族の墓域と見られている。奈良時代

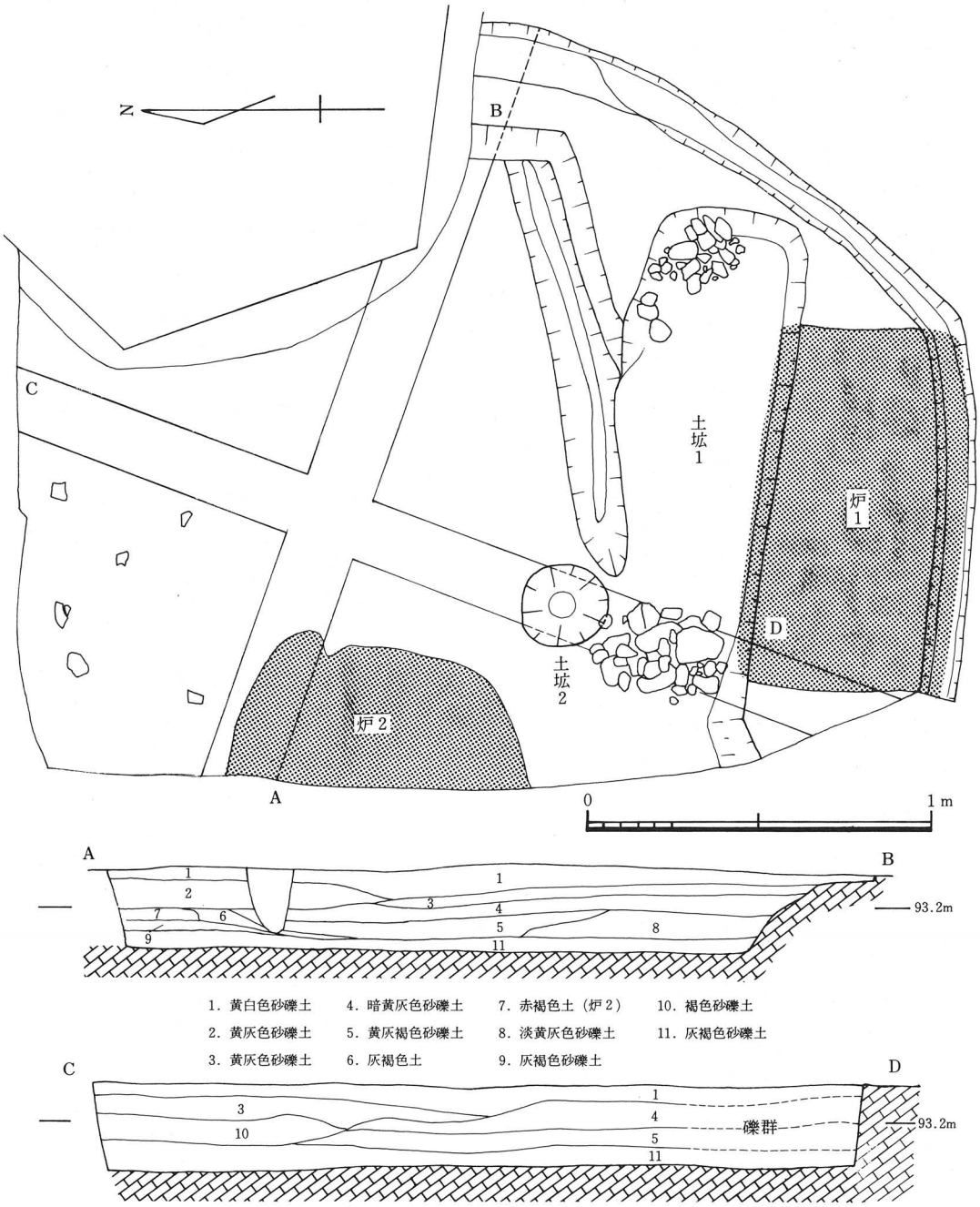
図－１　調査地位置図



図－2　調査区位置図

前後には、安宿郡内に片山廃寺、玉手廃寺、原山廃寺、五十村廃寺、円明廃寺の古代寺院が多数建立される。

当該地は、玉手山遊園地の東端部の稜線上にやや小高く隆起した場所である。直ぐ北側に玉手山７号墳があり、周辺にも前期から中期にかけての古墳が多数密集している場所である。その頂部に既存の展望台があって造成が行われていることから遺跡があっても削平や撹乱されている可能性があった。しかし、古墳又は集落跡の存在する立地でもあり、鉄塔建設とアンテナ取付け工事によって造成が成されるため、国庫補助の援助で平成５年４月６日、敷地内の中心部分に試掘トレンチを設定して調査を実施した。結果は、弥生時代の土器を伴い竪穴状遺構が遺存していることが判明した。このことから、事業者と協議をして遺跡の影響受け遺構が存在している可能性がある部分を発掘調査することとなった。調査は、平成５年５月26日から６月11日まで実施した。


N
B
C
土坑1
炉1
D
土坑2
炉2
A
0
1 m
A
B
93.2m
1. 黄白色砂礫土
2. 黄灰色砂礫土
3. 黄灰色砂礫土
4. 暗黄灰色砂礫土
5. 黄灰褐色砂礫土
6. 灰褐色土
7. 赤褐色土（炉2）
8. 淡黄灰色砂礫土
9. 灰褐色砂礫土
10. 褐色砂礫土
11. 灰褐色砂礫土
C
D
礫群
93.2m

図－3　遺構平面図・断面図

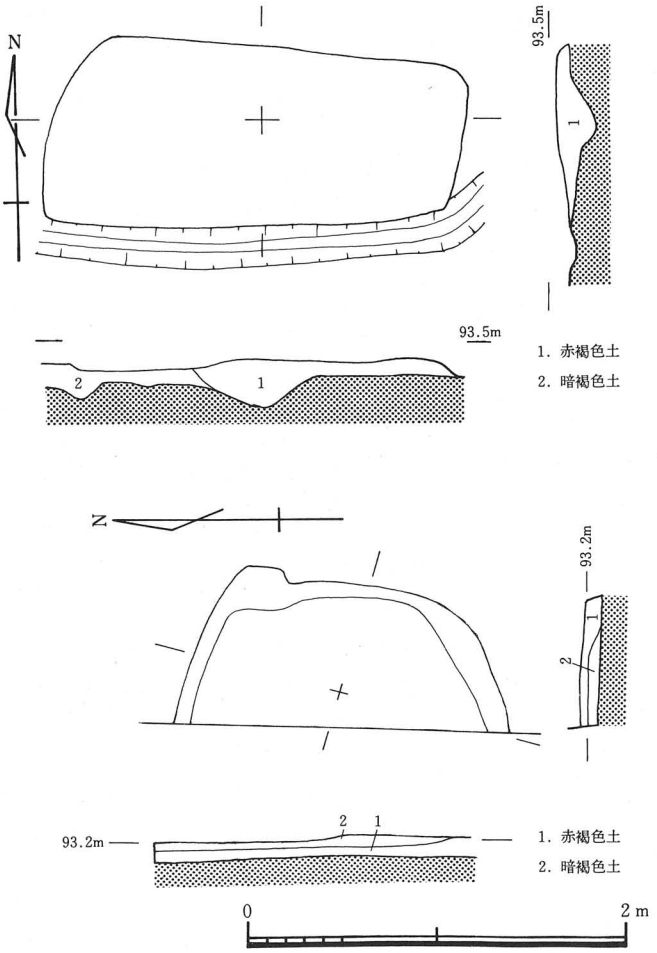
調査は、展望台を中心としてその南側周辺部約35㎡を実施した。調査区の標高は、高所で93mであり、四周に傾斜している。玉手山７号墳の墳丘下部に竪穴式石室、家形石棺を移築している場所とほぼ同標高で、距離は約50m離れている。掘削は人力により慎重に実施し、弥生時代の竪穴住居の一部を検出した。住居は、２回以上の建替えを行い、上層の住居を住居－１、下層の住居を住居－２とした。住居－１内の炉と土抗を炉－１、土抗－１とし、住居－２内の炉と土抗をそれぞれ炉－２、土抗－２とした。遺物は、弥生土器、鉄器、炭等が出土した。以下遺構、遺物の概略を行う。

竪穴住居－１

弥生時代の竪穴住居で、調査区が限られていることから住居全体の形態が不明確である。上層から検出された住居－１は、調査区の南端部分から多角形状に排水溝が巡る住居である。

排水溝は、調査区の西端から東西方向に２m以上が直線的に伸び、調査区の中央部分で北東方向に約50°の傾きをもって屈曲し約2.7m直線に伸び、さらに北端部分で同様の傾きを以て磁北方向に屈曲している断面逆台形を呈する溝である。全体の地形が北東側から南西側に傾斜して排水溝の流れも緩く南西方向に下向している。長さ5.4m、幅20～35㎝、深さ５㎝を図る。検出した角を基準とした場合、７角形、直径７m前後の住居となるであろう。住居は、表土を約５～10㎝除去した段階で検出した。埋土は、黄白色砂礫土であるが下層の住居－２上層と同様である。東西方向の排水溝に平行するように接して炉を検出した。

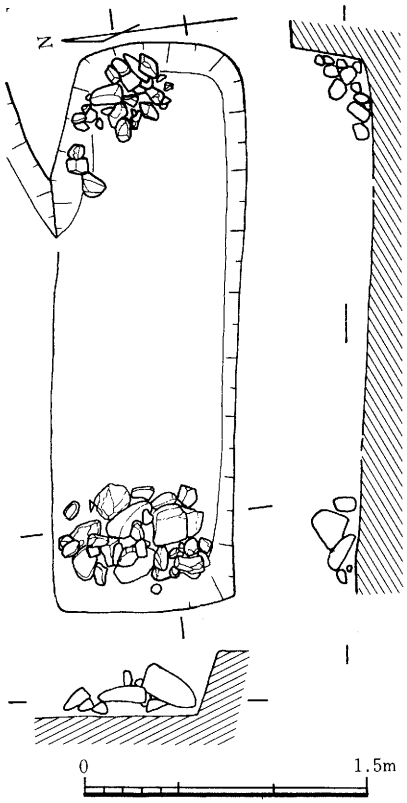
炉は、東西方向に2.1m、南北方向1.2mの長方形の焼土面である。



図－４　炉－１（上）・炉－２（下）

竪穴住居－２

下層の住居は、最低２回の建替えが行われ同一地点に２ツの住居が重複して検出された方形プランの形態と考えられる。規模は、東西方向3.85m以上、南北方向3.5m以上、深さ50㎝である。南側端部は上層の住居－１内の約２m北側、東側端部は、0.6m西側へ垂直に近く地山を掘削した住居である。住居の傾きは、N－10°－Wである。南側床面に南東角部から西側方向に伸びた住居の端部となる排水溝を検出した。排水溝は、断面U字形で長さ約2.5m、幅25～35㎝、深さ５㎝強で東側から西側にわずかに下向している。北側方向へは掘削がなされていない。西側端部の続きは、土抗－１によって一部削平されている。この排水溝から北側へ約50～230㎝の場所から東西方向80㎝以上、南北方向180㎝の炉が床面より25㎝の高さで検出した。炉－２周辺から炭層が広がり、一時期埋土中層で床面があった可能性がある。また、排水溝の西側先端部付近に円形土抗－２を検出した。



図－５　土抗－１

土抗－２は、直径50㎝、深さ45㎝で貯蔵穴であろう。住居の基本土層は、黄灰色砂礫土、黄褐色砂礫土、灰褐色砂礫土で全体に多数の砂礫が含まれる。

炉－１

竪穴住居－１の住居内南側に検出した東西2.1m、南北1.2mの炉で方形プランである。埋土は、上層が焚火をしたように赤褐色によく酸化された焼土である。部分的に炭のブロックがあり、よく焼成されて堅く凝固した土層である。２層は、暗褐色焼土で１層より炭と焼土塊が少ない。炉の中央部下層に径35～50㎝の円形落ち込みがあった。埋土より弥生土器少量が出土した。

炉－２

竪穴住居－１の住居東側に検出した東西80㎝以上、南北180㎝の隅丸方形プランの炉である。埋土は、赤褐色土でよく焼成されているがあまり堅くなく粘土質の厚さ約７㎝の土層である。どのような性格の炉であるかよく分からないが全体によく焼成されているものの竪穴住居内に

おいて日常的な炉として使用していた状況ではない。炉の周辺埋土には灰褐色土があり炭の混入が薄く層状に認められた。炉の埋土内から弥生土器が数片出土した。

土抗－1

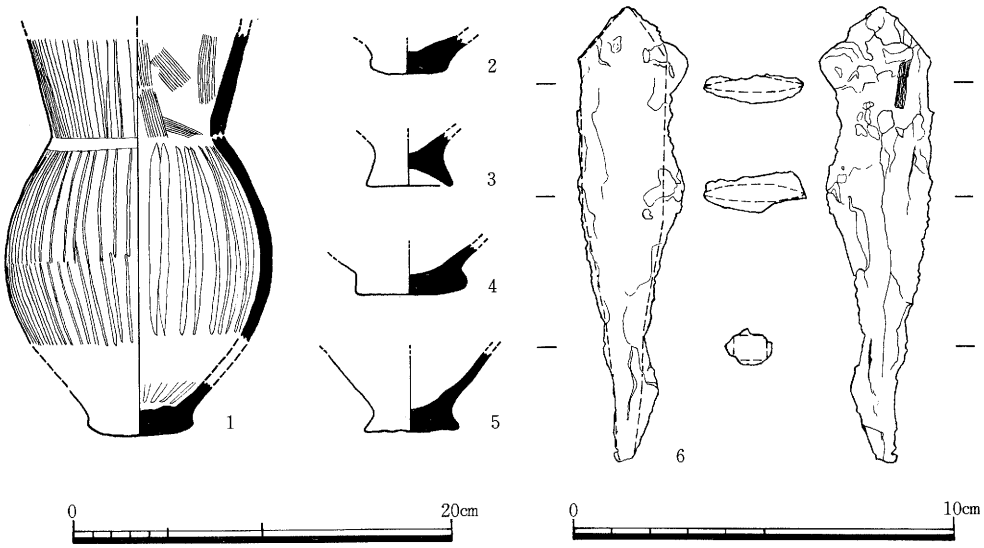
竪穴住居－1内に掘り込まれた隅丸方形プランの土抗である。長辺約3.0m、短辺1.0m、深さ40㎝の規模である。底部はほぼ平坦で西側にやや高くなっている。土抗の北側一部、東側、南側の大部分が地山の定ガ城累層を掘削した壁部分が遺存して垂直に近く立ち上がっている。土抗の長軸方向の傾きは、E－10°－Sである。遺構の切り合い関係は、上層住居の炉－1が土抗－1の上層に広がっていたこと、下層の住居の埋土や南壁、排水溝の一部を削平して掘り込まれていることから上層の住居と下層の住居の中間の時期に掘削されたことが明白である。埋土は、黄灰褐色砂礫土で住居の埋土とほぼ同様である。土抗の東西両隅又は底部に5～30㎝大の礫が多数集積していた。東側の礫群は、北東の隅から礫を流し込んだように入れ、底部から壁の立ち上がり上層にかけて不規則に入れられていた。礫の大きさも5～15㎝と疎らで円礫が多い。西側礫群は、南北に75㎝、東西に50㎝の範囲で5～30㎝大の不均一な礫を三角錐状に固めて東側礫群との在り方が異なるような置き方である。時期は、埋土と礫の中から弥生土器の破片が少量出土したことと遺構の切り合い関係から住居の上層と下層の使用された期間内である。

土抗－2

竪穴住居－2の床面から検出した円形土抗である。位置は、東西方向の排水溝に接して、南北方向床面端部から2.35mを測り、炉－2より南東へ0.35mの場所である。規模は、ほぼ50㎝の円形プラン、深さは0.45mのU字形断面である。埋土は、灰褐色砂礫土で下層から弥生土器が少量出土した。

長頸壷（1）

この壷は、竪穴住居－2の中層から下層にかけての第8層淡黄灰色砂礫土又は第11層灰褐色砂礫土から出土した。時期は、弥生第Ⅴ様式の長頸壷である。全体を接合することが出来なかったが口縁部以外の形態はほぼ復元実測することが出来た。器高は、21.1㎝以上、胴部最大径13.9㎝、底部径5.5㎝である。頸部は、胴部との接合部分で9.0㎝を測り直線的に外方へ広がっている。胴部は、楕円形を呈し胴の中程に最大径がある。底部は、底が緩く湾曲して安定性に欠ける。色調は、灰褐色、胎土は、白色とクサリ礫を少量含むが精良な粘土を使用している。ただ、底部の中に1㎝角で厚さ0.5㎝もある石が混入している。外面の調整は、頸部と体部の大部分をヘラミガキしている。胴部のヘラミガキは2回に分割して行っている。胴部下端と底



図－6　出土遺物

部は、平滑なナデを施している。内面は、頸部では斜め方向から縦方向の不規則な板ナデ又はハケ目で、胴部は縦方向の板ナデである。器壁は、頸部で7㎜とやや厚いが胴部はそれより少し薄い。

壷又は甕の底部（2～5）

実測の出来るものとして壷又は甕の底部が竪穴住居－2の床面に近い埋土から数点出土し、時期の判るものはなかった。以下その概略を記す。

（2）は、竪穴住居－2の中央部埋土から出土した。平底で角が丸くなっている。底径4.1㎝である。色調は、浅黄橙色。胎土は、微砂粒とクサリ礫を少し含みやや粗い胎土である。内外面の調整は、平滑にナデている。

（3）は、竪穴住居－2の埋土から出土した。外下方にハの字状に広がる底部で底部径4.4㎝を測る鉢になるかも知れない形態である。色調は、浅黄橙色で胎土は精良である。

（4）は、平底で角が丸く上方で膨らんでいる。底部径5.9㎝を測り、磨耗が激しい。色調は、浅黄橙色で断面が黒灰色である。胎土は砂粒とクサリ礫を多く含み粗い粘土である。

（5）は、平底で外側に踏張った形態の底部で底径5.1㎝を測る。色調は、浅黄橙色で胎土はやや密である。外面は、板ナデかナデで平滑にして、内面は、板ナデとヘラミガキによって仕上げている。

鉄製鏃（6）

竪穴住居－2の下層から出土した大形の有茎鉄鏃である。全体に錆が浮き上がり本来の形状

が不明確であるが、先端部が正三角形の羽子板状になるであろう。全長12.0㎝、最大幅2.3㎝、茎の部分0.9㎝である。厚さは、身が4～5㎜でレンズ状となり茎は7～9㎜方形である。反りはない。重量は、33.5gを測る。

まとめ

今回の調査は、玉手山遺跡内の丘陵の稜線上において、アンテナ設置の為の鉄塔建設に伴う事前の発掘調査である。事前に事業者から市教育委員会に対してこの工事予定地点での遺跡の現状と遺跡内における書類の届出書類の手続きについてご相談を受けた。この時点で、この場所には古墳や集落遺跡が存在することは明確でなく、存在の有無は試掘調査の結果によって明らかにしなければならないことになった。試掘調査によって弥生時代の遺構を検出して、遺構の遺存部分の発掘調査したものである。結果は、前頁に報告したとおりである。調査地は、公園の造成時に大部分削平されているものと考えられたが、調査区の中心部分にある展望台の製作が人力によって施工されており重機を使用していなかったことが幸いして撹乱部分が限定的であった。

今回の調査は、玉手山遊園地内で柏原市の文化係が独自で発掘調査した最初の調査である。弥生時代の集落遺構は、玉手山6号墳の下層から竪穴式住居が検出され、玉手山丘陵南半部の開発において溝等が検出されている。遺物は、玉手山1、9号墳の周辺でも土器の出土があり、その他に銅鏃や銅鐸などがある。玉手山丘陵の周辺は、大和川、石川、原川と大小の川の氾濫原に囲まれ丘陵全体が住居に使用されていたのであろう。昭和の後半期は、玉手山丘陵が低丘陵であることから開発の波が急速に広がり丘陵全体を住宅化してしまった。

遺構は、弥生時代後期の竪穴式住居を2又は3軒検出した。全体の形態は、不明である。下層と中層の住居は、方形の竪穴住居である。南端部に排水溝があるが、東端部に排水溝がなく住居の拡張又は排水溝の必要がない住居構造であったかも知れない。出土遺物は、ごくわずかであるが弥生時代第Ⅴ様式に属する特徴の形態の壺又は甕の底部が幾つかある。鉄鏃は、住居埋土中から出土している。上層の竪穴式住居は、表土直下から排水溝と炉を部分的に検出した多角形住居の一部である。弥生時代後期の住居は、円形又は方形のものが多く今回の住居は特異な住居と言える。玉手山丘陵の中心部にあり、最も高所の位置を占める場所である。この住居の性格は、大和川と石川の合流地点を直ぐ北側に持ち、河内地域を一望に鳥瞰出来る地理的位置からも軍事的にも有力な豪族の居住家屋であった可能性があろう。

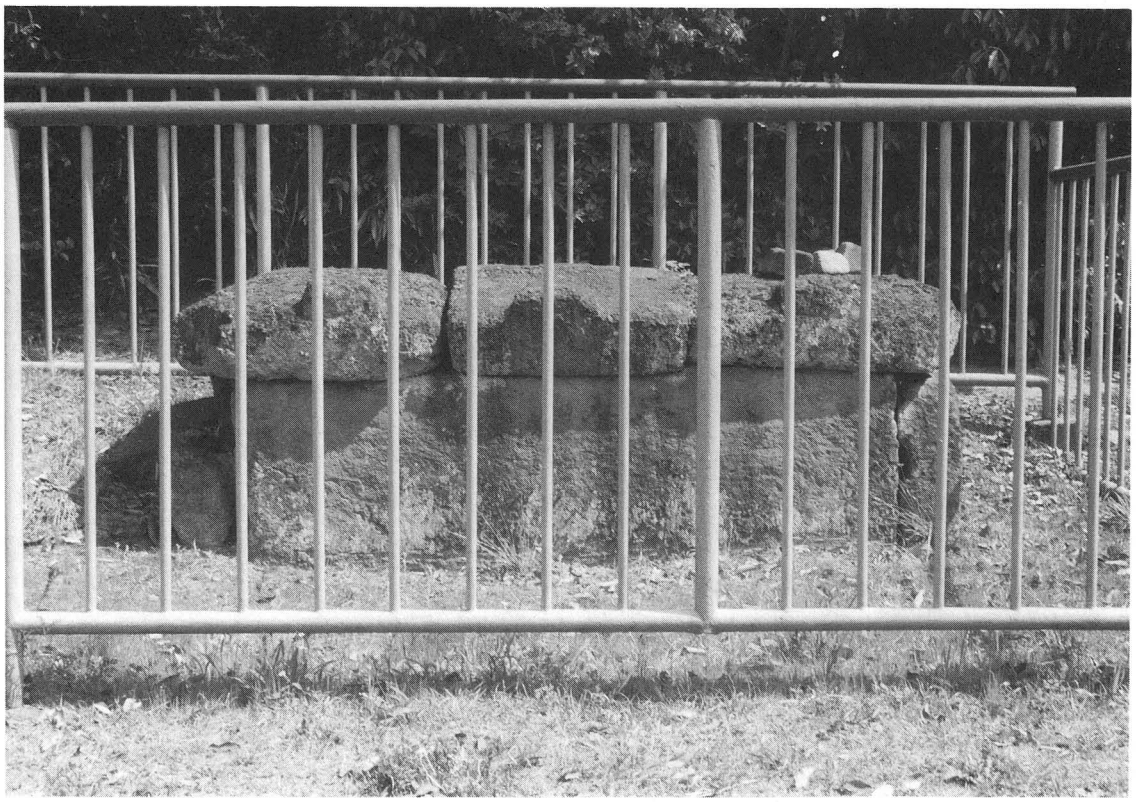
図　　版

図版一　航空写真

昭和30年代航空写真

玉手山遊園地鳥瞰写真

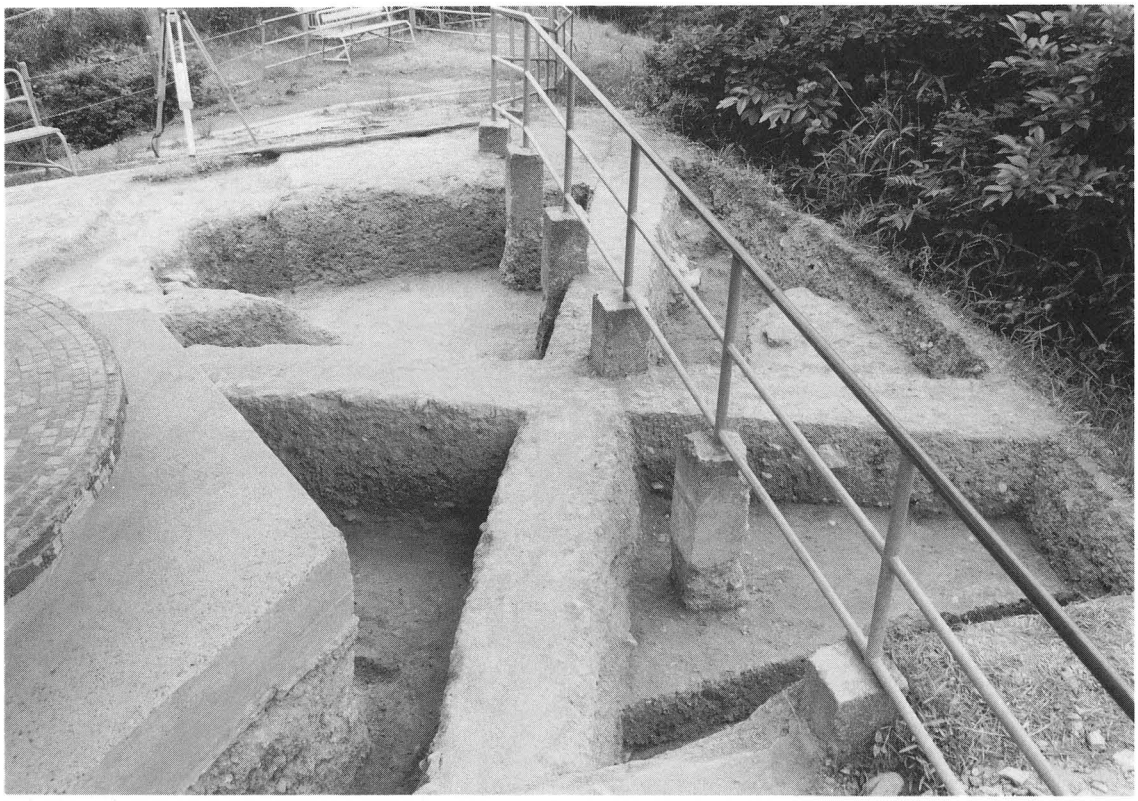
玉手山６号墳竪穴式石室



玉手山組合式家形石棺

図版三　竪穴住居

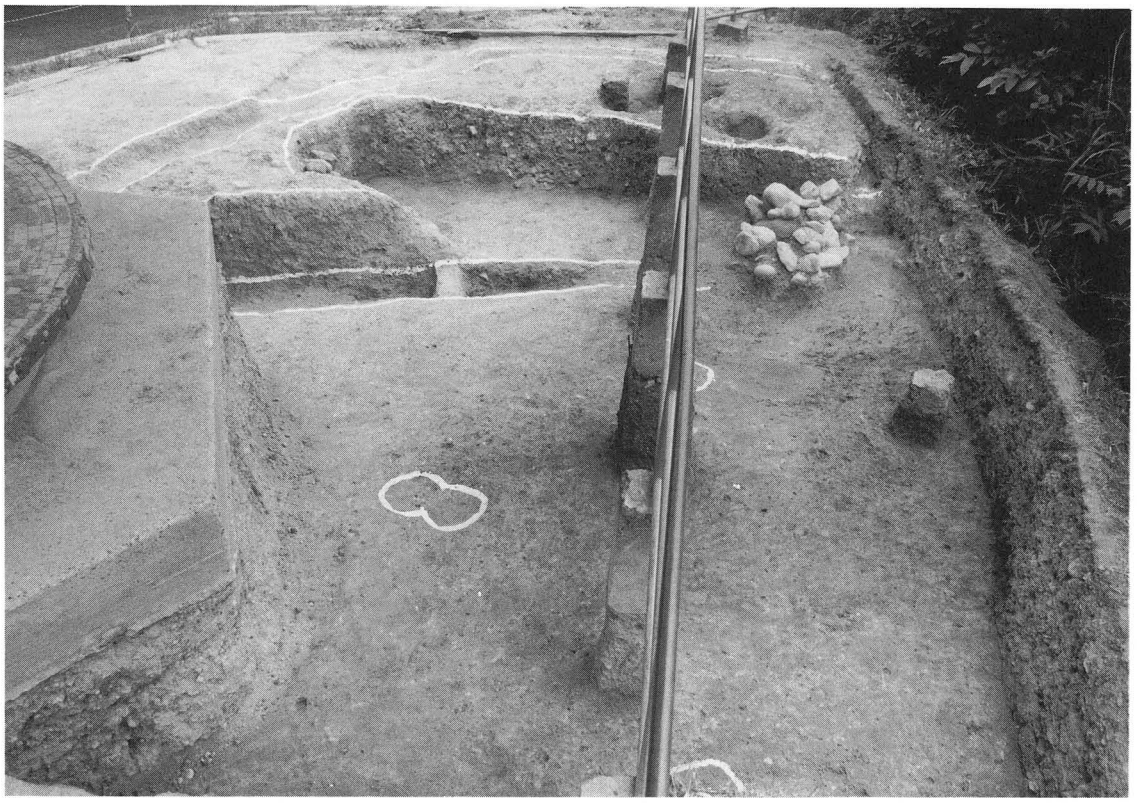
土層断面



竪穴住居全景（北側から）

図版四　調査区全景

南側方向から望む



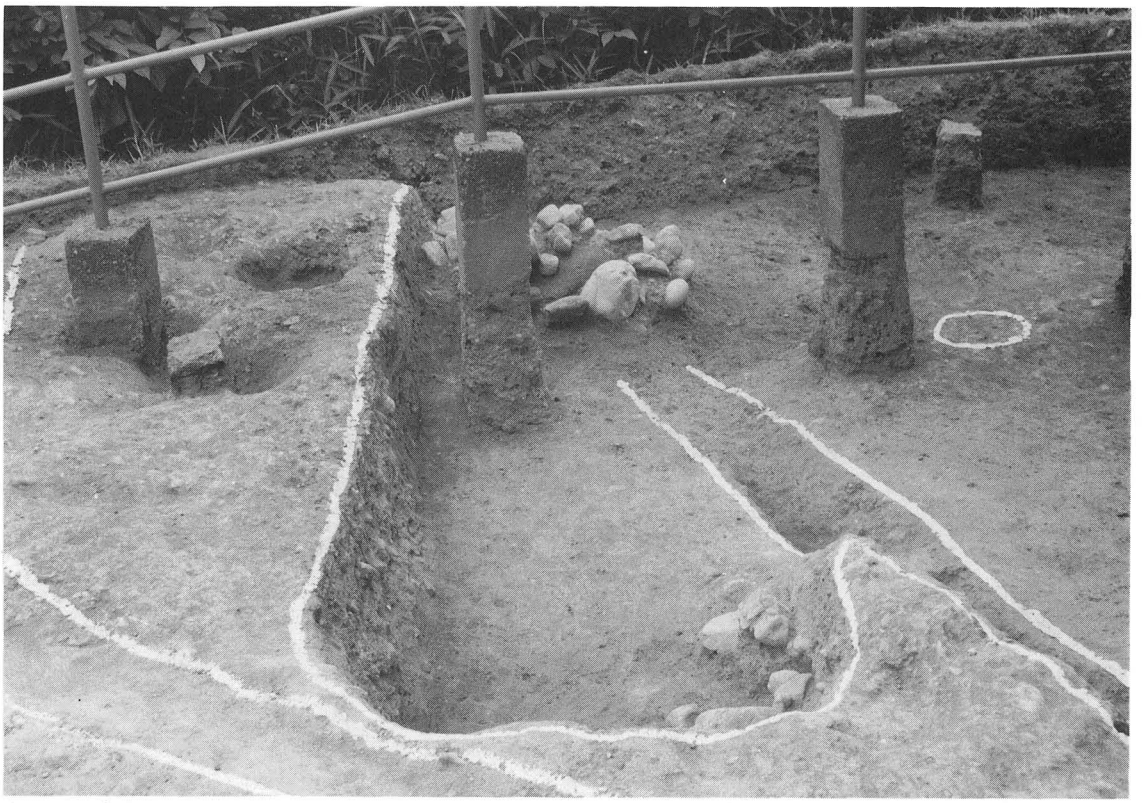
北側方向から望む

図版五　炉一、二

炉1

炉2

図版六　土坑一



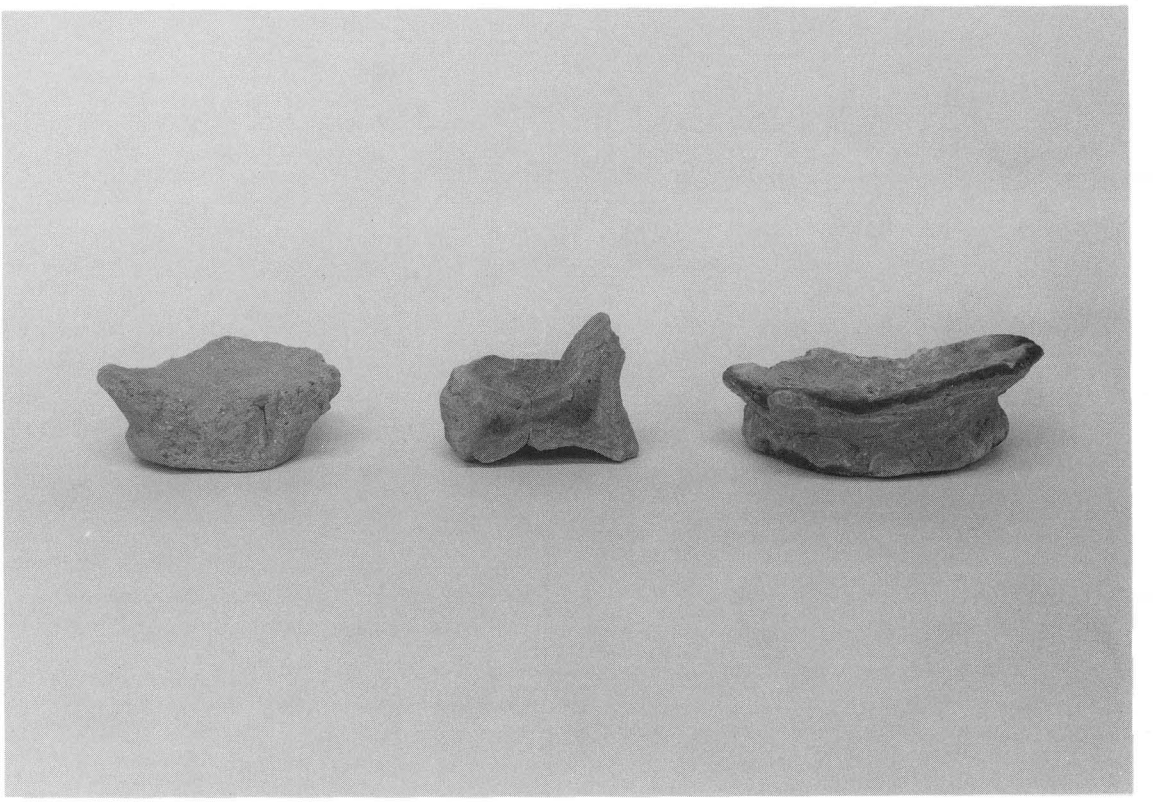
東側方向から全景

同　完掘状況

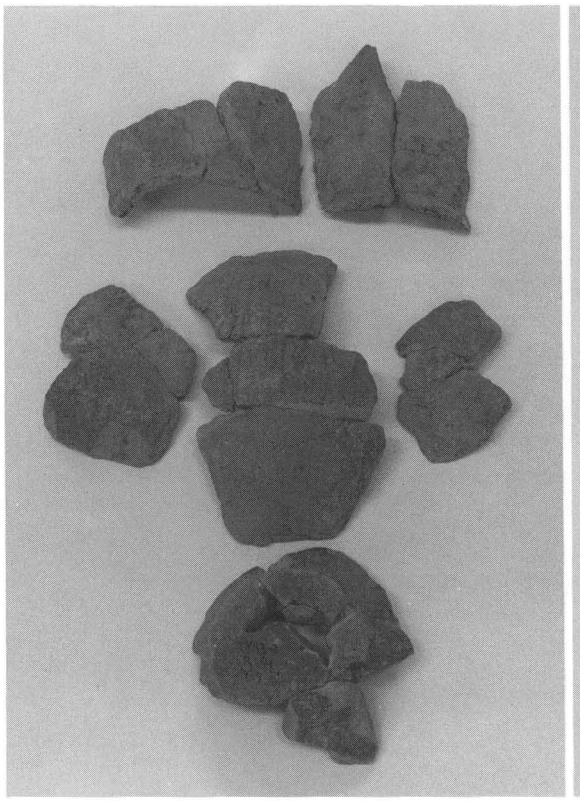
北側集石状況

南側集石状況

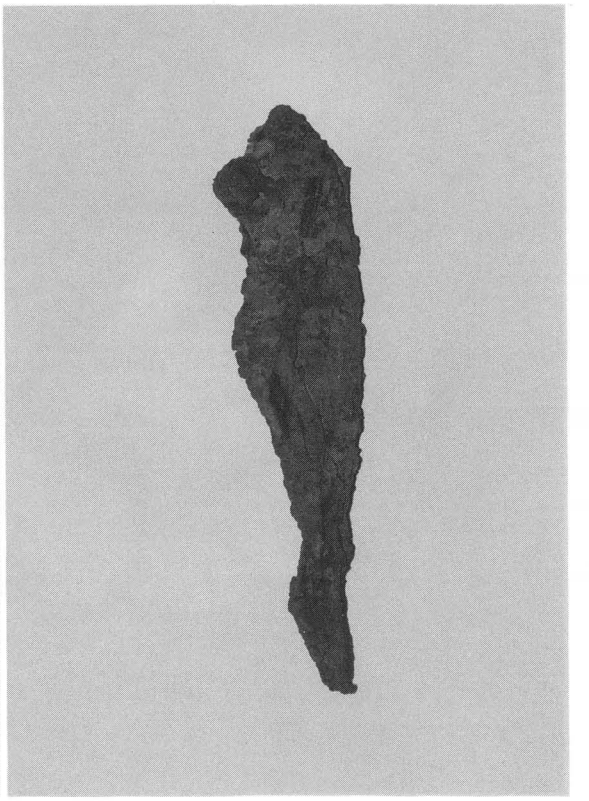
図版八　出土遺物



土器の底部



壺の破片



鉄鏃

柏原市文化財概報 1993-Ⅷ

玉手山遺跡

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582大阪府柏原市安堂町1番43号
電話（0729）72－1501　内線5133
発行年月日　平成6年3月31日
印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所